

# 聖アウグスティヌス隠修士会の発展初期段階における試行錯誤

—パヴィアのサン・ピエトロ・イン・チェル・ドーロ聖堂  
聖アウグスティヌス墓碑を例に—

## Trial and Error in the Early Development of the Ordo Eremitarum Sancti Augustini

The Arca of St. Augustine in the Basilica of San Pietro in Ciel d'Oro in Pavia as an Example

坂 本 環\*

Tamaki SAKAMOTO

### はじめに

北イタリアの都市パヴィアにあるサン・ピエトロ・イン・チェル・ドーロ聖堂には、聖アウグスティヌス（354-430）のものとする墓碑が置かれている。14世紀に聖アウグスティヌス隠修士会（Ordo Eremitarum Sancti Augustini）の注文によって制作された、高さ3メートルを超える大理石製の荘厳なモニュメントである。この墓碑に関しては、注文の経緯に関する当時の史料が残されていないことや、作者が無名であること、細部の技巧においても同時代の他の墓碑と比較して稚拙であると見られることなどから、これまでの研究の多くは部分的な図像解釈に止まっていた。本稿は、注文主であるアウグスティヌス隠修士会の発展初期段階における不安定な状況や葛藤、それに対する試行錯誤という歴史的視点から、墓碑の全体像を統一的に解釈することを目的とするものである。

以下においてはまず、パヴィアのアウグスティヌスの墓碑の主題と注文主、および制作時期について概説する。さらに、この墓碑に見られるとされてきた稚拙さと論理的不整合について、先行研究を援用しつつ指摘する。次に、その不整合とアウグスティヌス隠修士会の発展初期段階の歴史との関連について仮説を提示し、墓碑の制作意図を探る。アウグスティヌス隠修士会は、教皇によって既存の複数の修道会が強制的に統合されて成立した托鉢修道会であり、その経緯故に設立当初の同会は内部の統制に苦慮し、さらには教皇庁や他の修道会などの外部との関係においても、自らのアイデンティティの揺らぎに直面し、都度対処を余儀なくされてきた。本稿はこのような歴史的状況とパヴィアの墓碑に見られる歪みとの相互関係について、有機的な解釈を試みる。これまで全体的な解釈を拒んできたこの墓碑の不整合性が、アウグスティヌス隠修士会の試行錯誤の痕跡であることを明らかにしたい。

\* さかもと たまき 国際文化研究科国際文化専攻博士後期課程  
指導教員：松原 知生

## 1. 聖アウグスティヌスの墓碑概要 ——主題・注文主・制作時期——

現在、サン・ピエトロ・イン・チェル・ドーロ聖堂の内陣に置かれているアウグスティヌスの墓碑には、3層からなる装飾が施されている（図1、2）。最下段には、使徒、福音書記者、助祭、隠修士らの像が刻まれる。柱は美德を表す立像である。2段目はアウグスティヌスの横臥像が置かれる空間である。6人の助祭とアンブロシウス、ヒエロニムス、大グレゴリウス及びT字の杖を持つ隠修士が、聖人の周囲を囲んでいる。聖人はミトラを戴いた司教の姿で本を広げ持ち、横たわる（図3）。横臥像がこのように開いた本を胸に乗せているのは、他に例をほとんど見ない独自の表現である<sup>1</sup>。



図1 サン・ピエトロ・イン・チェル・ドーロ聖堂外観



図2 ジョヴァンニ・ディ・バルドゥッチョの追隨者《聖アウグスティヌスの墓碑》1350年代以降、大理石、305×314×168cm、パヴィア、サン・ピエトロ・イン・チェル・ドーロ聖堂



図3 左：「アウグスティヌスの横臥像」、右：「アウグスティヌスの横臥像」部分

<sup>1</sup> もう一つの貴重な例は、アリエノール・ダキテーヌの墓の横臥像である。ノーランによれば、この横臥像は墓に刻まれた肖像のうち本を持った最初の女性像である。また、聖職者や信徒の墓において閉じた本を体の脇に持つものは1200年後頃より多数現れるものの、知る限りにおいて、開いた本を読む男女を表現した唯一の例であるという。K. Nolan, *Queens in Stone and Silver: The Creation of a Visual Imagery of Queenship in Capetian France*, Gordonsville, 2009, pp. 111-112, p. 222, n. 140.

第3段では、9枚のレリーフでアウグスティヌスの生涯が語られる。物語は、現在の身廊側から見て左短辺の「ローマとミラノで修辞学を教えるアウグスティヌス」から始まる。身廊側正面の長辺には、「聖アンブロシウスの説教に耳を傾けるアウグスティヌス」、「アウグスティヌスと聖シンプリキアヌスとの出会い、アウグスティヌスの改宗」、「アウグスティヌスの洗礼／着衣」の3枚が並ぶ。右短辺の「アウグスティヌスの聖遺物の移送」を表す2枚を経て、アプシス側長辺に廻り、「モニカの葬礼」、「アウグスティヌスによる『会則』の授与」、「フォルトゥナトゥスへの反論」で締めくくられる。その上部には三角破風が置かれ、アウグスティヌスの奇跡が10の場面で表現される（図4、5）。

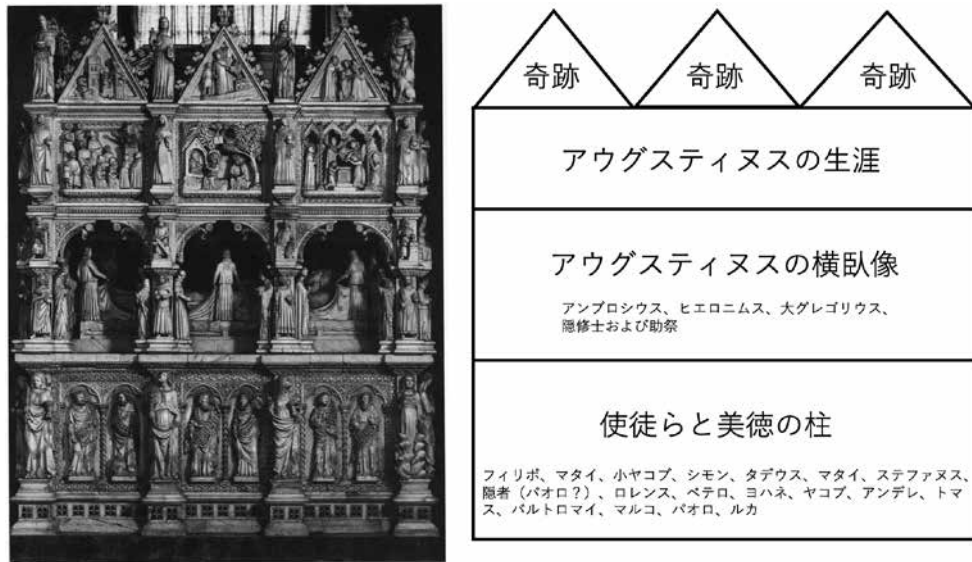
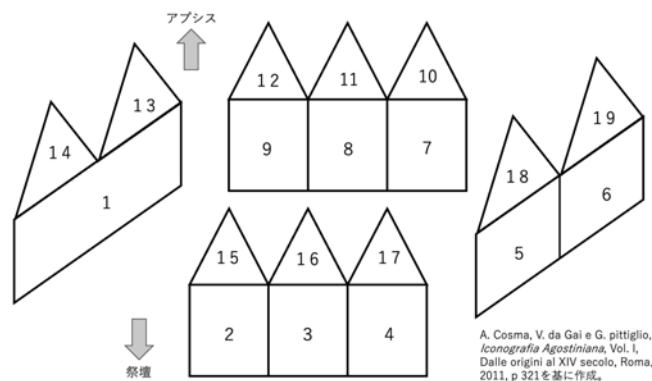


図4 左：《聖アウグスティヌスの墓碑》正面、右：《聖アウグスティヌスの墓碑》構成



A. Cosma, V. da Gai e G. pittiglio, *Iconografia Agostiniana*, Vol. I, Dalle origini al XIV secolo, Roma, 2011, p 321を基に作成。

1. ローマとミラノで修辞学を教えるアウグスティヌス
2. 聖アンブロシウスの説教に耳を傾けるアウグスティヌス
3. アウグスティヌスと聖シンプリキアヌスとの出会い、アウグスティヌスの改宗
4. アウグスティヌスの洗礼／着衣
5. リウトブラントがサルディーニャからアウグスティヌスの聖遺物を持ち帰る
6. 聖遺物をバヴィアの門からサン・ピエトロ・イン・チェル・ドーロへ移送する
7. モニカの葬礼
8. アウグスティヌスによる『会則』の授与
9. フォルトゥナトゥスへの反論
10. アウグスティヌスと『悪の書』
11. アウグスティヌスと『悪の書』
12. 死の床のアウグスティヌスが病人を癒す
13. 死の床の司祭長の前にアウグスティヌスが現れる
14. 司祭長がアウグスティヌスの祝日を祝う
15. アウグスティヌスが囚人を解放する
16. アウグスティヌスが囚人をグラヴェローネ川へ導く
17. アウグスティヌスが女の悪霊を祓う
18. 病気の巡礼者たちの前にアウグスティヌスが現れる
19. 病気の巡礼者たちはサン・ピエトロ・イン・チェル・ドーロ教会で癒される

図5 《聖アウグスティヌスの墓碑》「生涯」と「奇跡」の構成および各主題

各場面の主題は、アウグスティヌス自身の著作である『告白』や5世紀のポッシディウスによる『アウグスティヌス伝』、ヤコブス・デ・ヴォラギネによって13世紀に書かれた『黄金伝説』、後述する14世紀のアウグスティヌス隠修士会士による歴史書などを典拠にしている。

墓碑全体は、天使、聖人、司教を模った85もの彫像で飾られている。マッシヴな重量感がありつつ全体を垂直に貫く柱が強調された、堂々とした構造をもつ墓碑である。現在、墓碑全体は1.5メートルほどの高さの基壇の上に置かれ、アウグスティヌスの聖遺体は墓碑の前にある祭壇の下部に納められている。

墓碑の制作に際して、アウグスティヌス隠修士会がイニシアティブを取ったことは間違いない。台座の上部にある碑文に、サン・ピエトロ・イン・チェル・ドーロのアウグスティヌス隠修士会院長であったボンファツィオ・ボッティジェッラの名前が刻まれている。

制作の時期に関しては見解が割れるものの<sup>2</sup>、1340年代以降の隠修士会の複数の総会議事録が、パヴィアの聖堂のための分担金を各地の修道院に課す旨などを記していること<sup>3</sup>、また、後の隠修士会士アントニオ・ダ・トルトーナが編纂した記録（1578年頃）によれば、1350年から隠修士会士が職人たちに食事を提供していた事実が判明すること<sup>4</sup>からして、1340年代から構想が始まり、1350年前後に制作が開始されたと推測される。

1357年に完成したアウグスティヌス隠修士会士ザクセンのヨルダン<sup>5</sup>による歴史書『修道士たちの生に関する書 (*Liber Vitasfratrum*)』には、次のような記述がある。これは明らかにサン・ピエトロ・イン・チェル・ドーロ聖堂のアウグスティヌスの墓碑を元に描写したものである。

ある聖堂の中に、それは我々の聖堂ではありませんが、ある偉大で神聖な司教の墓があり、その墓の上には肖像が彫られ、多くの兄弟や、より優れた修道会士たちと一緒にいるようでした。しかし、この墓はその聖堂の人々によってあまり大切に保管されておらず、埃まみれの古い講壇と燭台が不遜にもその上に投げ込まれているようでした。兄弟たちが聖堂で墓を眺めていると、見よ、司教の彫像が立ち上がり、自分の上に投げ込まれた価値のないものを憤然と投げ捨てたように見えました。そして、司教は墓から立ち上がり、司教の正装で祭壇の前に向かって立ちました。そして、歌いながら兄弟たちを自分のもとへ招き始めました。「子らよ、来て私に聞き従え。主を畏れることを教えよう<sup>6</sup>」〔詩編34:12〕。彼はその言葉をグラドゥアーレの音楽に合わせて歌いました。それは司教が戴冠式で一般的に行う方法です。彼は歌い終わると座り、すべての兄弟に彼の前に列をなして座るように命じました。そして、父が息子たちに言うような甘い励ましをされました。このことから、兄弟は、この人が聖アウグスティヌスであることを霊的に理解しました<sup>7</sup>。

<sup>2</sup> L. Bourdua, “Entombing the Founder: St Augustine of Hippo”, in *Art and the Augustinian Order in Early Renaissance Italy*, eds. by L. Bourdua, A. Dunlop, Hampshire/Burlington, 2007, p. 34, n. 25が諸説を紹介している。

<sup>3</sup> 1341年にトゥールーズで開かれた総会決議は、隠修士たちに対しパヴィアを訪れるよう奨励し、ミラノの総会決議（1343年）は、各修道院がパヴィアの修道院のために支援するよう繰り返し要請している。1348年のパヴィアの会議に関する短い記録にはこの件に関する記述はないが、バーゼルの総会決議（1351年）は、各管区は今後3年間「祝福されたアウグスティヌスの分担金として (*pro collectea beati Augustini*)」12フローリンを支払うこと、さらに修道会の共同財源として12フローリンを支払うことを命じている。Ibid. p. 35.

<sup>4</sup> 「この期間中、彼らはいつも職人たちのために食事を作っていました。[……] 1350年に始まりましたが、この墓碑や他のさまざまな場所のために、さらに多くの費用が必要です」。R. Maiocchi, *L'Arca di S. Agostino in S. Pietro in Ciel d'Oro*, Pavia, 1900, p. 11.

<sup>5</sup> ドメニコ会第2代総長のヨルダヌス・デ・サクソニア（1190-1237）とは別人である。

<sup>6</sup> 聖書協会共同訳による。以下同。

<sup>7</sup> Jordan of Saxony, *The Life of the Brethren*, trans. by G. Deighan, ed. by J. E. Ratelle, Villanova, 1993, pp. 106-107.

のちに詳しく述べるように、このサン・ピエトロ・イン・チェル・ドーロ聖堂は、アウグスティヌス隠修士会がここに入る以前は別の修道会であるアウグスティヌス律修参事会<sup>8</sup>（*Canonici Regulares Sancti Augustini*）によって所有、管理されていた。この書は「ある聖堂」（律修参事会の聖堂）でアウグスティヌスの墓が蔑ろにされていることを嘆いている。「司教の正装」をした「ある偉大で神聖な司教」の肖像が「より優れた修道会士たち」に囲まれている様子は、墓碑中心部の司教服姿のアウグスティヌスの横臥像を明確に想起させるものであり、従って本書が書かれた1350年代半ばには、少なくとも横臥像を中心とした主要部分は完成していたと考えられる。なお、台座には1362年12月14日という日付が院長の名と並んで記されているが、この年には上記墓碑制作のための分担金が減額されていることから<sup>9</sup>、この時に制作上の何らかの目途がついたことを記念したものと推測できよう。

従来の研究はこの墓碑に関して、同時代に作られた他の墓碑と比較して著しい稚拙さや不整合が見られると指摘してきた。ポープ＝ヘネシーは、ボローニャのサン・ドメニコ聖堂にある聖ドメニコの墓碑やミラノのサンテウストルジョ聖堂にある殉教者聖ピエトロの墓碑と比べて「デザインが重く、装飾過多<sup>10</sup>」であるとし、ホワイトは「カリフラワーの木に鳥がトカゲのように這いずり廻っている<sup>11</sup>」と酷評した。またモスコヴィッツはこの墓碑について、殉教者聖ピエトロの墓碑のような優雅さに欠け、聖ドメニコの墓碑のような明白な論理性もないとする<sup>12</sup>。このような評価がこれまでアウグスティヌスの墓碑の統一的な解釈を阻んできたことは否めない。デールは稚拙さの原因を、トスカーナやローマ、ヴェネツィアといった芸術の中心地から遠く離れた場所で制作されたためであると指摘している<sup>13</sup>。モスコヴィッツは論理性の欠如の理由を同時代の墓碑以外の建造物に求め、ローマのコンスタンティヌスの凱旋門の構造と関連付けて理解しようとする<sup>14</sup>。しかし本稿は、アウグスティヌスの墓碑のこのような不整合は、アウグスティヌス隠修士会自体に内在するものではないかと考える。当時同会が抱えていた不安定さや葛藤、それに対する数々の試行錯誤とその首尾不首尾が、この墓碑に歪みとして現れているのではあるまいか。個々の図像および全体像について、会の歴史的背景との関連を検討する。

## 2. 聖アウグスティヌス隠修士会の設立経緯

### 1. 「伝説」の創造 ——創始者聖アウグスティヌス

ここで、聖アウグスティヌス隠修士会の設立経緯と墓碑制作当時の状況を確認しておきたい。同会は当時、設立されて100年を迎えようとしていたところであった。しかしそこまでの道のりは決して平坦ではなく、またこのパヴィアのサン・ピエトロ・イン・チェル・ドーロ聖堂を取得した経緯も、教皇庁や他の修道会、およびパヴィア市民をも巻き込んだ波乱含みのものであり、しかもその波乱はその後数世紀に渡って続くという厄介なものであった。

<sup>8</sup> 律修参事会 (*canonici regulares*) とは、聖アウグスティヌスの会則に従って共住生活を行う聖職者たちの会である。修道参事会、修道祭式者会とも称される。司教座聖堂参事会員、すなわち司教に直接仕える参事会員のうち、11-12世紀の教会改革の気運の中でアウグスティヌスの会則を生活の基盤に据えて共同体を成した者たちが、在俗参事会員と区別されてこのように呼ばれるようになった。杉崎泰一郎『修道院の歴史——聖アントニオスからイエズス会まで』創元社、2015年、196-203頁。

<sup>9</sup> Bourdua, *op. cit.*, p. 35.

<sup>10</sup> J. Pope-Hennessy, *Italian Gothic Sculpture*, New York, 1985, p. 26.

<sup>11</sup> John White, *Art and Architecture in Italy 1250-1400*, New Haven/ London, 1993, p. 602.

<sup>12</sup> A. F. Moskowitz, "A Tale of Two Cities: Pavia, Milan, and the Arca di Sant' Agostino", in *Notes in the History of Art*, vol. XI, No. 2, 1992, p. 4.

<sup>13</sup> S. Dale, *The Arca di Sant' Agostino and the Hermits of St. Augustine in Fourteenth-Century Pavia*, London/Turnhout, 2014, p. 11.

<sup>14</sup> Moskowitz, *op. cit.*, pp. 4-7.

聖アウグスティヌス隠修士会は13世紀半ばに成立した托鉢修道会である。ドメニコ会やフランチェスコ会を含む4大托鉢修道会の一つに数えられ、都市における司牧活動を担っていた。また大学世界と密接に結びつき、市民らの知的生活にも深く関わっていた。しかし、隠修士会の起源はその名のとおり、隠修的生活にある。彼らの前身は、イタリアのトスカーナ地方で孤住あるいは少人数の緩やかな共住生活をしてきた隠修士たちであった。

西欧では10世紀後半から、古代の砂漠の隠者である聖アントニウスを理想とする観想的生活に関心が集まっていた。背後には、世俗の拒絶と改悛による救済への願望がある。当時の西欧は社会的に大きな変革期にあり、経済的格差などのさまざまな社会矛盾が露呈していた。さらには、もはや封建制度の一部となった大規模な修道院組織への反発が、使徒的生活清貧を重視した簡素な生活に戻るべきとの戒めを生んだことも指摘できる。11世紀に入るとまずイタリアで、荒れ野 (eremus) に隠遁し禁欲を旨とした孤住生活を始める隠修士 (eremita) が多く現れるようになった。彼らは俗世を離れて祈りと修行に没頭し、またその傍ら遍歴説教を行い貧者を助ける慈善活動を積極的に行って、多くの俗人から共感を得た<sup>15</sup>。

ただし、このように各々の個人的な活動を基礎とする隠修士らが、教皇を頂点とする組織改革を行おうとするローマ教会にとって厄介な存在であったことはいうまでもない。1215年に開かれた第4ラテラノ公会議は、「修道会のあまりの多さが神の教会に深刻な混乱を持ち込むことがないよう<sup>16</sup>」、以降の新修道会の設立を禁止し、新たに修道生活に入ることを望む者は既に認可された修道会と会則を選択するよう命じて、隠修士らの押さえ込みを図った。

さらに1243年12月16日、教皇インノケンティウス4世は、主にルッカやシエナ周辺に住む隠修士たちに対し、2通の勅書 (『インクムビト・ノビス (*Incumbit nobis*)』及び『プラエセンティウム・ヴォビス (*Praesentium vobis*)』) を発して、アウグスティヌスの会則の下での統合を命じる<sup>17</sup>。隠修士たちの無秩序な諸活動を体系化し統制下に置きたいという当局の意図が読み取れよう。この時集められた隠修士たちは翌年3月、「トスカーナの聖アウグスティヌスの隠修士たち」と名付けられ、新たな修道会として認可された<sup>18</sup>。

その後約40通に渡る勅書を経て、1256年4月9日、教皇アレクサンデル4世は勅書『リケト・エクレシアエ・カトリカエ (*Licet ecclesiae catholicae*)』を發布、「トスカーナのアウグスティヌスの隠修士たち」に他の4つの修道会、すなわちグリエルモ派、隠修士ジョヴァンニ・ボーノの兄弟たち、ブレッティーノ派とモンテ・ファヴァーレ派を加えて一つの修道会とする<sup>19</sup>。グリエルモ派とは、トスカーナ南部のカスティリオーネ・デッラ・ペスカイアに庵を結んだ隠修士グリエルモ・ダ・マラヴァッレの死後、彼を敬い集まった者たちの共同体が発端となって形成された修道会である。5会のうちで最も歴史が長く、また活動地域が広く資産も潤沢である点で、さらに創始者の名が明確に残っているという点で、別格の存在であった。上記1243年の勅書でもグリエルモ派ははっきりと除外されており<sup>20</sup>、その重要性和不可侵性を教皇庁も認識していたことが窺える。隠修士ジョヴァンニ・ボーノの兄弟たちも同様に、創始者の名が残る修道会である。ジョヴァンニ・ボーノは、チェゼーナ近郊のブトリオーロと呼ばれる谷で、沈黙、祈り、

<sup>15</sup> 古代から中世における修道院制度の誕生と発展について、以下の諸著を参照。杉崎泰一郎『12世紀の修道院と社会』原書房、1999年。同『修道院の歴史』前掲書。

<sup>16</sup> 決議第13条「新修道会の〔設立〕禁止について」。「第四ラテラノ公会議 (1215年) 決議文翻訳」『クリオ』29号、東大クリオの会、2015年、102頁。

<sup>17</sup> F. Andrews, *The Other Friars: The Carmelite, Augustinian, Sack, and Pied Friars in the Middle Ages*, Woodbridge, 2006, pp. 71-76; B. Rano, *Augustinian Origins, Charism, and Spirituality*, ed. J. E. Rotelle, Villanova, 1994, pp. 315-316.

<sup>18</sup> Ibid. pp. 316-317.

<sup>19</sup> Ibid. pp. 327-329.

<sup>20</sup> 勅書『インクムビト・ノビス』は、「聖グリエルモの兄弟たちを除く、トスカーナに住むすべての隠修士たち、すべての愛する息子たちよ」で始まる。Ibid., p. 315.

断食といった禁欲的な生活に専念した隠修士であった。欲望の誘惑に負けないよう、時に自ら肉体を傷つける厳しい苦行を課したとも言われる。彼の元に信者たちが集まり発展したのが、隠修士ジョヴァンニ・ポーノの兄弟たちである。他方、ブレッティーノ派の創始者は明確ではない。13世紀初頭に、現在のマルケ州にあるブレッティーノ村に集まった者たちの始めた宗教的共同体が起源であると考えられている。モンテ・ファヴァーレ派はペーザロのファヴァーレ山の庵を本拠とする共同体である。グリエルモ派から分離した一派であるとも考えられている<sup>21</sup>。

これら諸会が統合されて成立した会は聖アウグスティヌス隠修士会と名付けられ、托鉢修道会として都市に居住し、人々の告解を聴く権限が認められた。これが、のちに「大合同 (Magna unio)」と呼ばれることになる隠修士会の起点である<sup>22</sup>。

「大合同」で集められた前身諸会は、上述のとおり、設立経緯や活動地域、従うべき規則や修道服など、それぞれに独自の背景をもつ修道会であった。中にはグリエルモ派のように既に100年近い活動実績をもつ会もある。彼らを統合させた勅書『リケト・エクレシアエ・カトリカエ』は、形式上は彼らからの発願を認めるという形を取ってはいるものの、実質的にそれが教皇からの強制であったことは明らかである。

このような寄せ集めの出発点をもつがために、さらには、そもそもが隠修士という一匹狼のアウトサイダーらに共同生活を強いるという起源をもつが故に、同会はその後長く内部の統制に苦しみ、アイデンティティの確立に向けた模索と葛藤を続けることとなった。

内部の統制は既に「大合同」直後から多難の様相を呈していた。統合後わずか数ヶ月で、グリエルモ派が事実上脱会している<sup>23</sup>。また、隠修士会士たちが着用すべき衣服の統一にも混乱が見られた。勅書では黒いフード付きの修道服を着用するよう定められたものの<sup>24</sup>、1290年ころまでに、これをめぐる規定の変更や教皇による許可文書が頻発している<sup>25</sup>。統合前の修道服にこだわる修道士が一定以上存在し、上層部が対応に苦慮したことが推測される。

さらに、成立後間もないアウグスティヌス隠修士会を窮地に追い込んだのが、教皇グレゴリウス10世の下で開催された1274年の第2リヨン公会議である。同会決議第28条「修道会設立の抑制について」では、上記第4ラテラノ公会議において定められた「新修道会の〔設立〕禁止」が改めて確認された<sup>26</sup>。実際はその後も新しい修道会は次々と認可されていたのであり、禁止規定は空文化していたとも言えるが、教会改革を徹底し、ことに教皇庁内部の政治的派閥争いを平定しようとしたグレゴリウス10世が、改めて厳格な態度を表明した一環であると捉えることができよう。これによりアウグスティヌス隠修士会は、1247年成立のカルメル会とともに、「別の仕方では命令がなされるまで<sup>27</sup>」その存続を保留とすることが決定された。沙汰を待つ不安定な期間は、その後20年以上続くことになる<sup>28</sup>。

この公会議では、当時最も大きな勢力を誇っていた2つの托鉢修道会、すなわちフランチェスコ会

<sup>21</sup> 以上の各会の詳細については、次を参照。K. Elm, “Comunità eremitiche italiane del XII e XIII Secolo. Studi sugli della storia dell’ Ordine Eremitano agostiniano” in *L’Eremitismo in Occidente nei Secoli XI e XII*, Milano, 1962.

<sup>22</sup> アウグスティヌス隠修士会の成立経緯については、以下の諸文献も参照。F. Roth, “Cardinal Richard Annibaldi First Protector of the Augustinian Order 1243-1276 (Continuation)” in *Augustiniana*, vol. 2, no. 2/3, 1952, pp. 108-149; 鈴木喜晴「14世紀修道会史叙述における「隠修」の問題——カルメル会とアウグスティヌス隠修士会を中心に」『Εκφρασις』早稲田大学ヨーロッパ中世・ルネサンス研究所、1号、2011年、124-137頁。

<sup>23</sup> この脱会は10年後の1266年、クレメンヌ4世による勅書『ファ・クアエ・イウディキオ (*Fa quae iudicio*)』によって正式に認められた。

<sup>24</sup> 「[……] すべての者は黒いフードを身につけるべきであり、他の色は認めない。フード以外の部分においても同様である。統一された服装が、同じ職業に就いていることを示すようにしなければならない [……]」。Rano, op. cit., p. 328.

<sup>25</sup> Andrews, op. cit., pp. 89-90.

<sup>26</sup> 「第二リヨン公会議 (1274年) 決議文翻訳」『クリオ』31号、東大クリオの会、2017年、146-147頁。

<sup>27</sup> 同147頁。

(1223年『第2会則』認可)とドメニコ会(1216年認可)も俎上に乗せられたが、しかし両会は「普遍教会への明白な有益性(*utilitas*)が顕著であるため<sup>29</sup>)に、その存続が認められた。両会の社会的影響力を改めて公認する文言であったとともに、それらの後塵を拝するアウグスティヌス隠修士会としては、己に対するシビアナ評価を突きつけられた形になっただろう。アウグスティヌス隠修士会は「有益」ではない。

フランチェスコ会の創設者であるアッシジのフランチェスコやドメニコ会を創設したドメニコ・デ・グスマンのようなカリスマ的創始者をもたず、また、フランチェスコ会の「清貧」のような中核思想やドメニコ会における遍歴説教・異端審問のような明確な存在目的も欠いていたアウグスティヌス隠修士会士らが、このような混乱と不安定の中で「アウグスティヌス」という高名な教父の名に拠り所を求めたのは、むしろ必然だったと言える<sup>30</sup>。

前述のとおり、アウグスティヌス隠修士会は1244年に成立した「トスカーナのアウグスティヌスの隠修士たち」を前身としている。とはいえ、ここに言う「アウグスティヌス」には、上記第4ラテラノ公会議で認められた会則のひとつである『アウグスティヌスの会則』に従うという以上の意味はなく、もとより、ヒッポの司教であった教父聖アウグスティヌスとの人的な関係を示すものではない。しかし、その名を受け継いだことは、アウグスティヌス隠修士会にとって僥倖であった。隠修士会は、内部の混乱を解消するための象徴的存在を、聖アウグスティヌスその人に求めた。会は、アウグスティヌスに従うべき規則の作成者であるのみならず隠修士会の創始者であると見做し、さらにはアウグスティヌス自身が同隠修士会の一員であるとする時代錯誤的な「伝説」を創造する。これはやがて、テキストや絵画・彫刻の形で内外に主張されることとなり、アウグスティヌスは、アウグスティヌス隠修士会の黒いフード付き修道服を着た姿で表されて<sup>31</sup>、構成員らの手本とされた。当然この「伝説」は、会の正統性、すなわち、1215年以前の創立であることを、外部に向けて主張するものとしても機能することになる。

## 2. 「伝説」の完成 ——パヴィアのサン・ピエトロ・イン・チェル・ドーロ聖堂

このような中で1327年、アウグスティヌス隠修士会は教皇ヨハネス22世から1通の勅書『ウェネランダ・サンクトールム・パトルム (*Veneranda sanctorum patrum*)』を受け取る。これは、パヴィアのサン・ピエトロ・イン・チェル・ドーロ聖堂を、これまでこの聖堂を所有してきたアウグスティヌス律修参事会とアウグスティヌス隠修士会とで共有することを定めるという「前代未聞の<sup>32</sup>」ものであった。パヴィアで最も重要な聖堂であり、ランゴバルド王リウトブランドや古代ローマの殉教者ボエティウスも埋葬されたこの聖堂は、1221年に同律修参事会に与えられて以降<sup>33</sup>、100年以上にわたって同会が管理し続けてきたものである。この勅書は当の律修参事会とパヴィア市民を憤激させるに十分であった<sup>34</sup>。彼らにとって、トスカーナで約70年前に生まれたばかりのアウグスティヌス隠修士会は、他所者であり新参者でしかなかっ

<sup>28</sup> 第2リヨン公会議におけるアウグスティヌス隠修士会とカルメル会の処置については、以下を参照。鈴木喜晴「ジョン・ベーコンソープのカルメル会史擁護——修道会の「正統性」と「継承」理念」『史観』早稲田大学史学会、160号、2009年、57-71頁。

<sup>29</sup> 『クリオ』31号前掲書147頁。

<sup>30</sup> Dale, op. cit., p. 21.

<sup>31</sup> その最初期の一例がシモーネ・マルティーニ作《サン・ジミニャーノの祭壇画》(1330年代前半)である。ここでアウグスティヌスは、司教服の下にアウグスティヌス隠修士会の黒いフード付きの修道服を重ねて着ている。

<sup>32</sup> Dale, op. cit., p. 20.

<sup>33</sup> 律修参事会側の資料 *Libro Rosso* には、1120年にすでに同会が所有していたことを示す記録があるが、現在のほとんどの研究者は1221年を支持する。Ibid., p. 44. n. 2.

<sup>34</sup> パヴィア市は伝統的に反教皇のギベリン派であり、この勅書が出た際もパヴィア市民は教皇に対して抗議の書簡を出したという。E. L. Saak, *High Way to Heaven: The Augustinian Platform between Reform and Reformation, 1292-1524*, Leiden, 2002, p. 164.



たのである。

教皇ヨハネス22世は、なぜこの聖堂をアウグスティヌス隠修士会に与えたのか。

隠修士会側がこれを所望した理由は明快である。後述するように、ここには8世紀以降、聖アウグスティヌスの聖遺体が安置されていた。隠修士会の創始者は聖アウグスティヌスであるという「伝説」を創造しつつあった会にとって、この聖堂はそれを完成させるためにどうしても必要な最後のピースであった。

聖堂を与えた教皇側の真の意図は定かではない<sup>35</sup>。形式上は、当時隠修士会の総長であったクレモナのグリエルモ・アマダーニに対する報酬であった<sup>36</sup>。グリエルモは勅書の前年、教皇の「横溢する権力 (*plenitudo potestatis*)<sup>37</sup>」を否定するパドヴァのマルシリウスの『平和の擁護者 (*Defensor pacis*)』に対して、『6つの誤謬に対する反駁 (*Reprobatio sex errorum*)』を以て反論し、書簡としてヨハネス22世に送っていた。当時教皇が必要としていたのは、世俗国家との対立における優位性およびそれを支える「横溢する権力」の概念の理論的根拠であった。グリエルモはこれを首尾よく提供したのである。満足した教皇はグリエルモを司教職に推挙するものの、しかし彼はこれを断り、代わりにパヴィアのサン・ピエトロ・イン・チェル・ドーロ聖堂の隣にアウグスティヌス隠修士会の修道院を建てる許可を求めた。これに応えたのが、上記勅書『ウエネランダ』である<sup>38</sup>。

勅書は名目上、ここに埋葬された聖アウグスティヌスとその「息子たち」、すなわちアウグスティヌス隠修士会士たちを再会させることを目的としている。

あなたがたはそこで、手足が頭に、息子が父に、弟子が師に、兵士が指揮官に結ばれるように、神と聖人に結びつけられ、使徒的權威の励ましによって、あなたがたの師であり、父であり、指揮官であり、そして頭であるアウグスティヌスの遺体が埋葬されていると知っている場所で、心からの喜びを表明できるのです<sup>39</sup>。

そのため、勅書には隠修士会が聖堂に歓迎されることが明記され、隠修士会士は聖堂に自由に出入りすることが認められた。さらに隠修士会士には、聖務の朗読を律修参事会と均等に分担して行うことが許可され、また信者の告解を聴き秘蹟を施す権限や、律修参事会や地元の司教と共有せずに遺言を受ける特権も与えられた。後者の特権は実際上かなりの収入をもたらすものとなり、この勅書によってアウグスティヌス隠修士会は大きな経済的地盤を築いたことになる<sup>40</sup>。総長グリエルモの働きは、実利的にも名誉上も、隠修士会に大きな利益をもたらした。

<sup>35</sup> デールは、パヴィアとミラノのヴィスコンティ家との政治的対立、およびバイエルン公ルートヴィヒへの教皇庁の介入という視点からこの勅書の意図を捉えようとする (Dale, op. cit., pp.5-17)。

<sup>36</sup> クレモナのグリエルモ・アマダーニは、1326年にアウグスティヌス隠修士会の総長に選任され、1342年、教皇クレメンス6世によって司教に任命されている。彼が総長であった16年間はちょうどバイエルン公ルートヴィヒと教皇ヨハネス12世およびベネディクト12世の間の争いによってイタリアで起こった深刻な政治的・宗教的騒乱の時期と重なっていた。この間、彼が双方に精力的に介入していたことが、16世紀の隠修士会士ニコラ・クルセニオの記録から判明している。N. Crusenii, *Monasticon Augustinianum*, XIII. De P. Guillelmo Cremonensi, XI Generali. [http://www.cassiciaco.it/navigazione/monachesimo/historia\\_ordinis/storiografi/crusenio/013\\_crusenio.html](http://www.cassiciaco.it/navigazione/monachesimo/historia_ordinis/storiografi/crusenio/013_crusenio.html). (2024/05/28参照)

<sup>37</sup> 「横溢する権力」については、将棋面貫巳『ヨーロッパ政治思想の誕生』名古屋大学出版会、2013年、56-60頁、托鉢修道会と教皇首位性論については、同書115-123頁、ローマのアエギディウスやヴィテルボのヤコブスと教皇絶対主義については、同書126-135頁を参照した。なお、*plenitudo potestatis* は直訳すると「権力の充満」となり「教皇至上権」などとも訳されるが、本稿では同書に従い「横溢する権力」とする。

<sup>38</sup> Dale, op. cit., p. 36, n. 44.

<sup>39</sup> Saak, op. cit., p. 160; Rano, op. cit., p. 334.

<sup>40</sup> Dale, op. cit., pp. 19-20.

教皇に密着したグリエルモのこのような姿勢は、隠修士会の設立経緯からして当然であったといえる。前述のとおり隠修士会は教皇によって作られたものであったし、会の初代監督官である枢機卿リックルド・アンニバルディは、教皇アレクサンデル4世の甥であった<sup>41</sup>。

この路線の源流は、1292年から1295年まで隠修士会の総長を務めたローマのアエギディウスに遡ることができる。彼は、パリ大学でトマス・アクィナスの薫陶を受けた神学者であり政治思想家である。隠修士会の理論的支柱の一人であった。1297年、アエギディウスは、教皇ボニファティウス8世の就任選挙の正当性を述べた論考『教皇の辞任について (*De renunciatione pape*)』の報酬として、教皇から隠修士会の存続承認を得ている。これによって会は、第2リヨン公会議以来の存続保留という不安定な状態から脱し、確実に地歩を固めたことになる<sup>42</sup>。さらにアエギディウスは、教皇の霊的世俗的支配権を正当化する論考『教会の権力について (*De Ecclesiastica potestate*)』によって、教皇から世俗的な課税の免除を得た。

一方でアエギディウスは、世俗の権力者とも良い関係を保っている。1280年頃、彼はフランスのフィリップ3世の依頼により、統治に関する論文『君主の統治について (*De regimine principum*)』を執筆した。息子のフィリップ4世はこれに対する報酬として、1294年、パリにある修道院を彼に寄贈している<sup>43</sup>。この書は王の美德に特化して論じており、教会特権と世俗の君主との関係というデリケートな問題には敢えて触れていない<sup>44</sup>。アエギディウスが優れた政治的バランス感覚を有していたことを示す例といえよう。

このような聖俗双方に対するアエギディウスの姿勢は、続く指導者たちにも受け継がれた。1287年の隠修士会総会では、アエギディウスの著作が、既に書かれたものも、また今後書かれるものも、アウグスティヌス隠修士会の教義であり不可侵のものとして遵守される旨が決定されている<sup>45</sup>。隠修士会士ヴィテルボのヤコブス、アウグスティヌス・トリウンフス<sup>46</sup>、総長サン・テルピディオのアレクサンデル、ウルビーノのバルトロマイらが、聖俗双方の権力者たちに対して頭脳を提供し、都度司教職などの報酬を得てきた<sup>47</sup>。

複数の修道会が統合されたことによる内部の混乱、ドメニコ会やフランチェスコ会のようなカリスマ的創始者や明確な存在目的の欠如という不安定な発展初期段階を歩んできたアウグスティヌス隠修士会にとって、対立するどちらの権力陣営にも配慮を欠かさないという全方位的姿勢は、何よりも自身の存続のために必要な方策であった。

しかしこのような多方面への配慮、言い換えるなら一貫性のなさが、会が教皇から得た最大の報酬であるバヴィアのサン・ピエトロ・イン・チェル・ドーロ聖堂においては、皮肉にも墓碑の論理の不整合として現れ出たとはいえないだろうか。墓碑に戻ってこの仮説について検討する。

### 3. 聖アウグスティヌス隠修士会の試行錯誤

#### 1. アウグスティヌスの墓碑の制作意図

そもそもアウグスティヌス隠修士会がこの墓碑を制作した意図はどこにあったのか。前述のとおり、会

<sup>41</sup> P. Piatti, *Il movimento femminile agostiniano nel Medioevo: Momenti di storia dell'Ordine eremitano*, Firenze, 1990, p. 25.

<sup>42</sup> Dale, op. cit., p. 24.

<sup>43</sup> 皮肉なことに、この修道院は上記第2リヨン公会議で弾圧され廃止されたサック修道会（キリストの償いの兄弟たち）にかつて所属していたものである。ここを拠点として、アウグスティヌス隠修士会は1290年から1317年にかけて、フランスで弾圧された数多くの修道院を受け入れ、フランスでの地歩を固めた。Dale, op. cit., p. 23.

<sup>44</sup> R. W. Dyson, *Giles of Rome's On Ecclesiastical Power: A Medieval Theory of World Government*, New York, 2004, p. xi.

<sup>45</sup> Dale, op. cit., p. 23.

<sup>46</sup> デールは彼が1298年から1300年の間総長であったとしているが (Ibid., p. 35, n. 30)、これはこの時総長であったアグスティノー・ノヴェット (Agostino Novello: 1240-1309) と混同したものである。両者は別人である。

<sup>47</sup> Ibid., p. 23.

は1356年に設立後100年を迎えようとしていた。聖アウグスティヌスを讃える壮麗なモニュメントでそれを記念したいという考えが持ち上がったのは当然であろう。

ただし、制作意図を考えるにあたっては、別途考慮しなければならない問題が控えている。制作開始時である14世紀の半ばにおいて、アウグスティヌスの遺体はこの聖堂の地下のどこかにあるという以外、所在が不明であったのである。

430年にアフリカのヒッポ（現在のアルジェリア・アンナバ）でこの世の生を終えた聖アウグスティヌスの遺体は、その後各地を転々と移送され、現在の地パヴィアに置かれたのは、8世紀にランゴバルドのリウトプラント王がサルデーニャ島から運び出して以降とされる<sup>48</sup>。しかし11世紀以来、遺体の聖堂内の正確な埋葬地はわからなくなっていた。少なくとも1022年までは知られていたものの、この年に聖人の片腕が金銭により売買され流出するという出来事<sup>49</sup>があり、その後遺体は地下に隠されて、いくつかの記録が「アウグスティヌスの遺体は地下にある」ことを示唆するのみとなっていたのである<sup>50</sup>。

アウグスティヌスの聖遺体とされるものが地下で偶然「発見」されたのは17世紀末になってからであり、さらに教皇ベネティクトゥス13世によってその真正性が確認されたのは1728年のことである<sup>51</sup>。とするならば、14世紀半ばの時点で、遺体の中に納める目処すらおそくない中、アウグスティヌス隠修士会はどのような意図でこの墓碑を制作したのだろうか。

アウグスティヌスの生涯を描いたレリーフの中に、隠修士会とアウグスティヌスとの直接の関係を示す特別な主題が表されていることは、これまでも指摘されてきた<sup>52</sup>。「アウグスティヌスの洗礼／着衣」の場面では、洗礼を終えたばかりのアウグスティヌスが、司教アンブロシウスと友人アリピウスと思われる人物によって衣服を着せられている（図6）。この服は、特徴的なフードの形から明らかにアウグスティヌス隠修士会の隠修士服と判別でき、アウグスティヌスがキリスト教徒となった直後から隠修士であったことを表している<sup>53</sup>。上記勅書『ウェ

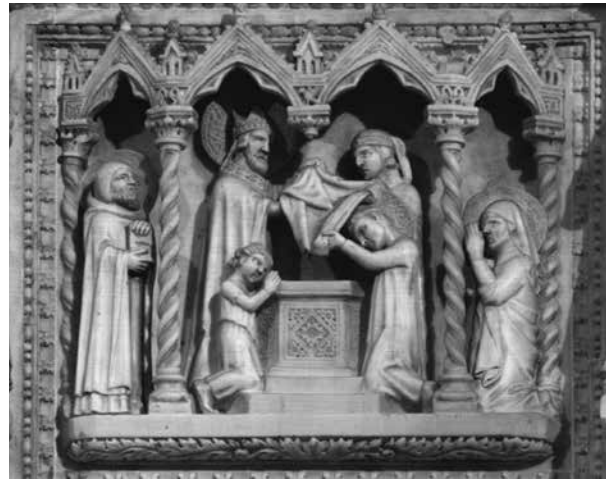


図6 「洗礼／着衣」

<sup>48</sup> この経緯は『黄金伝説』にも詳しく記載されている。墓碑の制作者が「アウグスティヌスの遺体の移送」の場面でこれを参照した可能性がある。ヤコブス・デ・ウォラギネ『黄金伝説 3』前田敬作・西井武訳、平凡社、2018年、326-327頁。

<sup>49</sup> カンタベリー大司教アエテルノトゥスが聖人の腕を銀100タラントと金1タラントで買ったという。A. Cosma, V. da Gai e G. pittiglio, *Iconografia Agostiniana*, Vol. I, Dalle origini al XIV secolo, Roma, 2011, p. 320.

<sup>50</sup> オピキヌス・デ・カニストリスは『ティチーノ〔パヴィアの古名〕の町の賞賛についての書 (*Liber de laudibus civitatis ticinensis*)』で、遺体が8世紀にリウトプラント王によって聖堂の地下礼拝堂の「深く、最も秘密の場所」に置かれたことを記している。J. T. Hallenbeck, "The Transferal of the Relics of St. Augustine of Hippo from Sardinia to Pavia in the Early Middle Ages", in *Studies in the Bible and Early Christianity*, vol. 41, Lampeter, 2000, p. 25, and in Latin, p. 35. また、ボーヴェのウィンケンティウスは、「聖堂の地下礼拝堂に井戸があり、毎年聖人の祝日〔8月28日〕には奇跡的に水が溢れ出す」と記録している。Speculum Historiale, cited in ibid., p. 23, and in Latin, pp. 211-212.

<sup>51</sup> Dale, op. cit., p. 6.

<sup>52</sup> C. Warr, "Hermits, Habits and History-The Dress of the Augustinian Hermits", in *Art and the Augustinian Order in Early Renaissance Italy*, eds. by L. Bourdua, A. Dunlop, London, 2007, pp. 23-25; Bourdua, op. cit., pp. 29-50など。

<sup>53</sup> 偽アンブロシウスによる『聖アウグスティヌスの改宗と洗礼について (*De conversione et baptismo sancti Augustini*)』(14世紀)や、フィレンツェの無名者による『聖アウグスティヌス隠修士会の起源と発展 (*Initium sive processus Ordinis heremitarum Sancti Augustini*)』(1322-29年)アレクサンドリアのニコラウスの『聖アウグスティヌスの説教 (*Sermo de beato Augustino*)』(1332年)などが、アウグスティヌスが洗礼直後に隠修士の黒い修道服を身につけたことを伝えており、これらのテキストが墓碑の表現の典拠になったと考えられる。Warr, op. cit., pp. 20-21.

ネランダ』以来、パヴィアのアウグスティヌス律修参事会とアウグスティヌス隠修士会は、アウグスティヌスの遺体が納められた特別な場所であるこの聖堂の所有の正当性を訴えて、「アウグスティヌスは参事会士であったか、隠修士であったか」をめぐる論争という形で争いを続けていた。中世の一聖堂の中で繰り広げられたこの2つの修道会の争いを「ティーポットの中の嵐<sup>54</sup>」に過ぎないと評する向きもあるが、しかしこの問題を単に中世の狭矮な見識から出たものと見るべきではない。「観想」か「活動」か、すなわちいわゆるマリアとマルタの喩で説明される隠修士会と律修参事会の関係、および1250年代のパリ大学を舞台とした托鉢修道会と在俗教師との対立、また荒野での祈りを中心とした生活を旨とする隠修士と都市での活動を旨とする托鉢修道会の優位性如何という、当時の修道会全体が抱えていたより大きな問いを反映した問題であることに留意しなければならない<sup>55</sup>。アウグスティヌス隠修士会もアウグスティヌス律修参事会も、双方多くを背負った状態で引くに引けない争いであった<sup>56</sup>。

隠修士会の衣服を身につけたアウグスティヌスというこのモチーフが、律修参事会に対する牽制であり、隠修士会の優位性を誇示することを意図したものであるのは明白である。

また、「アウグスティヌスによる『会則』の授与」の場面でも、中央のアウグスティヌスは周囲の隠修士たちと同じ衣服を着用し、会の創始者であり構成員であることが強調されている（図7）。この場面は、会の準則である『アウグスティヌスの会則』がアウグスティヌス本人から直接隠修士たちに手渡されたことを説明するものであるが、アウグスティヌス自身の著作や『黄金伝説』などの聖人伝にもその旨の記述はない。隠修士会独自の主題である。隠修士会士であるフリーマールのハインリヒやザクセンのヨルダンが記した歴史書などによって14世紀に確立された「伝説」であると考えられる<sup>57</sup>。隠修士会とアウグスティヌスとの直接の関係を証するものとして、この主題は会内で繰り返し用いられた<sup>58</sup>。パヴィアの墓碑におけるこの場面も、上記「洗礼／着衣」の場面と並んで、律修参事会に対し隠修士会の特権的な立場を誇示する役割を期待されたものであろう。



図7 『会則』の授与

さらに、洗礼直前の「改宗」（図8）の場面で聖シンプリキアヌスが隠修士の姿で庵の中にいる描写も、アウグスティヌス隠修士会以外では見られない独自の表現であって、アウグスティヌスが隠修士であったことを強調しているという指摘がある<sup>59</sup>。マニ教徒であったアウグスティヌスは、まさに隠修士シンプリ

<sup>54</sup> A. F. Moskwitz, *Nicola Pisano's Arca di San Domenico and Its Legacy*, Pennsylvania, 1994, p. 31.

<sup>55</sup> 両修道会の論争と「観想」と「活動」の関係については、次を参照。マージョリ・リーヴス『中世の預言とその影響——ヨアキム主義の研究』大橋喜之訳、八坂書房、2006年、320-346頁。

<sup>56</sup> 両修道会の論争はその後17世紀まで続く。論争の経過については、次を参照。Kaspar Elm, “Augustinus Canonicus-Augustinus Eremita: Quattrocento cause célèbre”, in: *Christianity and the Renaissance: Image and Religious Imagination in the Quattrocento*, eds. by Timothy Verdon and John Henderson, Syracuse, 1990, pp. 83-107.

<sup>57</sup> フリーマールのハインリヒによる歴史書『隠修士会の起源と発展、及びその真の名称に関する論考 (Tractatus de origine et progressu Ordinis Fratrum Eremitarum S. Augustini et vero ac proprio titulo eiusdem)』(1334年)や、前述のザクセンのヨルダンによる歴史書『修道士たちの生に関する書 (Liber Vitasfratrum)』(1357年)、偽アウグスティヌスによる『庵の兄弟たちへの説教集 (Sermones ad fratres in eremo)』(14世紀)などが、アウグスティヌスによって会則を与えられたことに言及している。Dale, op. cit., pp. 114-115.

<sup>58</sup> 他に、エアフルトの聖アウグスティヌス聖堂ステンドグラス (1314年)や、グアリエント・ダルポによるパドヴァのエレミターニ聖堂フレスコ画 (1338年、現存せず) など。

<sup>59</sup> E. L. Saak, *Creating Augustine; Interpreting Augustine and Augustinianism in the Later Middle Ages*, Oxford, 2012, pp. 160-161.

キアヌスに出会うことで、キリスト教徒となることを決意したのである。

このような隠修士会とアウグスティヌスとの関係性、およびそれが意味する会の権威の誇示は、論争の直接の相手方である律修参事会のみならず、バヴィアの市民へも向かっていただろう。前述したように、市民らはアウグスティヌス隠修士会を余所者と看做していた。会は彼らバヴィア市民に対しても、この聖堂を共同所有する正当性を説得しなければならなかったのである。

墓碑制作の動機としては、こうした律修参事会やバヴィア市民に対する思惑に加えて、この聖堂を訪れる信者や巡礼者への配慮もあったと考えられる。既に述べたとおり、14世紀当時、アウグスティヌスの遺体は、地下のどこかにあるという以外正確な所在がわかっていなかった。信者や巡礼者たちからは戸惑いの声が日々届けられていただろう。彼らの注意を「聖堂内の別の場所〔地下〕から逸らす<sup>60</sup>」ために、聖人の肖像墓を地上に建てたのだとするブルドゥアの見解に同意する<sup>61</sup>。墓碑上部の「奇跡」の場面には、身体の不自由な巡礼者たちが聖アウグスティヌスに促されてサン・ピエトロ・イン・チェル・ドーロ聖堂に詣で、癒される場面が描かれている（図9）。これが、同聖堂と聖人に対する彼らの親近感を呼び起こし、奇跡への期待を高めていたことは間違いない。墓碑は、彼らに対し明確な礼拝目標を提供するという役割を果たしていた。



図8 「シンプリキアヌスとの出会い、改宗」



図9 「サン・ピエトロ・イン・チェル・ドーロの巡礼者たち」

## 2. アウグスティヌスの墓碑の先行例

さらに隠修士会には、自らが他の修道会と肩を並べる存在であることを示したいという意図もあっただろう。アウグスティヌスの墓碑が同じ托鉢修道会であるドメニコ会やフランチェスコ会を意識して作られたことを、先行するいくつかの例との比較から確認する。

聖ドメニコの墓（図10-1）は、ドメニコ会の創始者であるドメニコ・デ・グスマンのために建てられたもので、ボローニャのサン・ドメニコ聖堂内サン・ドメニコ礼拝堂に置かれている。この墓の周囲や背景にある天使などの彫像は、数世紀に渡って様々な芸術家が手がけたものであるが、原型はニコラ・ピサーノが1264年から1267年にかけて制作した大理石の棺である。棺は聖人の生涯を描いた6つのレリーフで飾られ、修道士、大天使、美德を表す8つの支柱の上に乗っていた<sup>62</sup>（図10-2）。棺の頂上では父なる神が世界を支配し、その下には全世界に贖いのメッセージを広めた4人の伝道者が、さらにその下にボローニャの8人の守護聖人に代表される教会の業が表されている。墓全体をもって、神学的教会ヒエラルキーの構

<sup>60</sup> Bourdua, op. cit., p. 50.

<sup>61</sup> ただしブルドゥアは、この墓は隠修士であるアウグスティヌスを強調する意図はなく、隠修士、司教、説教者、異端者を打ち砕く者、そして奇跡を起こす者としてのアウグスティヌスを巡礼者たちに提示することが目的であると考えている。Ibid.



図10-1 ニコラ・ピサーノ他《聖ドメニコの墓》13-18世紀、大理石、ボローニャ、サン・ドメニコ聖堂サン・ドメニコ礼拝堂

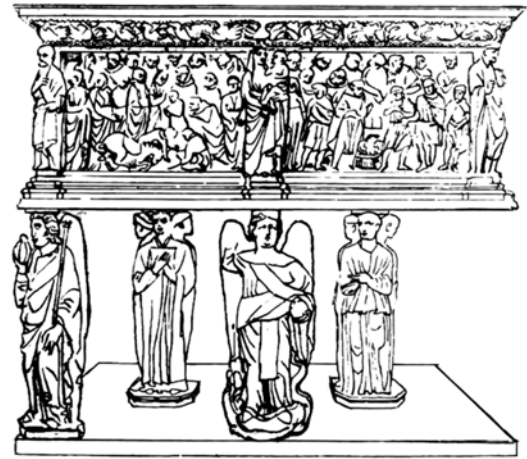


図10-2 《聖ドメニコの墓》部分。「美德」他と「生涯」。ポープ=ヘネシーによる再現。J. Pope-Hennessy, “The Arca of Saint Dominic. A Hypothesis”, in *Burlington Magazine*, XCIII, 1951, p. 351より引用

造を表現している<sup>63</sup>。

モスコヴィッツによれば、聖ドメニコの墓は元々聖堂内のトラメッツォ（内陣障壁）近くにあつて修道士側と信徒側の空間とを分けており、信徒に向けられた側では、彼らに対しドメニコの偉大さをアピールすることが意識されていたという。信徒側のドメニコの奇跡の構図は比較的単純で遠くからでも読み取りやすい。最初のエピソードである「ナポレオーネ・オルシーニの蘇生」は聖ドメニコの癒し手としての力を証明するものであり、信徒に対する修道会の宣伝として役立っていた。中央の聖母子を挟んだ右側では、火に投げ込まれてなお燃えなかったドメニコの書の正当性が語られる。さらにモスコヴィッツは、反対側の修道士たちに向けられた辺では、修道会の創設と拡大に関するエピソードが描かれ（「インノケンティウス3世による修道会の認可」と「説教活動の許可」）、短辺のレリーフ（「ドメニコの前に現れるペテロとパウロ」、「天使にもてなされるドメニコと修道士たち」）は、信徒と聖職者の両方の聴衆に向けられるように巧妙に考案されていると指摘する<sup>64</sup>。バヴィアのアウグスティヌスの墓碑も、このドメニコの墓の構成に倣い、様々な受け手を想定していた可能性が考えられる。後述するように、後世の幾度かの移送のためにレリーフの位置が入れ替わっている可能性があるものの、アウグスティヌスの奇跡の図像は主に信徒や巡礼者に向けられたものであろう。一方「会則」の場面は、律修参事会に対する牽制であると同時に、隠修士会士に対して自らの起源への自覚を促す場面とも捉えられる。

聖ドメニコの墓をモデルとして作られたのが、ミラノの殉教者聖ピエトロの墓（図11-1）である。ピサの彫刻家ジョヴァンニ・ディ・バルドゥッチョが制作したもので、1339年の日付が記されている。ピエトロはドメニコ会に所属する修道士で異端審問官として活動したが、ミラノ郊外で複数の異端者によって殺害された。死後1年を経ずして列聖されている。ピエトロの棺は聖人の生涯を表す8つのレリーフで飾られ、対神徳と枢要徳を表す擬人像柱に支えられている（図11-2）。ドメニコの墓の人物支柱が大天使やドメ

<sup>62</sup> 現在この柱は存在しないが、1951年、ポープ=ヘネシーが、様式、考古学的データ、出土品に基づき、墓の原型を説得力ある形で復元した。J. Pope-Hennessy, “The Arca of Saint Dominic. A Hypothesis”, in *Burlington Magazine*, XCIII, 1951, pp. 347-351; A. F. Moskwitz, “Giovanni di Balduccio’s Arca di San Pietro Martire: Form and Function”, in *Arte Lombarda*, 96/7, 1991, p. 16, n. 5.

<sup>63</sup> Moskwitz, *Nicola Pisano’s Arca di San Domenico and Its Legacy* cit., pp. 12-13.

<sup>64</sup> A. F. Moskwitz, *Italian Gothic Sculpture c. 1250- c. 1400*, Cambridge, 2001, pp. 32-33.



図11-1 ジョヴァンニ・ディ・バルドゥッチョ《殉教者聖ピエトロの墓》1339年、大理石、ミラノ、サンテウストルジョ聖堂ポルティナーリ礼拝堂



図11-2 《殉教者聖ピエトロの墓》部分。「美德」と「生涯」



図12 「フォルトゥナトゥスへの反論」

ニコ会の修道士、侍者などであるのに対し、ピエトロの墓の支柱は美德の擬人像に限定されている<sup>65</sup>。聖アウグスティヌスの墓碑を制作したのはバルドゥッチョの追随者であると考えられており、師の作品であるピエトロの墓の制作にも携わっていた可能性のある彼は、パヴィアの墓碑においてもピエトロの墓を手本に支柱を美德で飾ることを選んだ。

ドメニコの墓も殉教者ピエトロの墓も、それまで多く見られた壁付き型や地下埋葬型の墓と異なり、独立型で見上げるほどの高さを備えている。また従来の伝統から外れ、墓を飾るのは聖書の物語ではなく聖人の生涯である<sup>66</sup>。聖人に対する崇拝の中心としての機能を有していることがわかる。パヴィアのアウグスティヌスの墓碑も、これらのコンセプトを受け継いだと考えられる。

パヴィアの墓碑がドメニコ会やフランチェスコ会を意識していた形跡は、アウグスティヌスの生涯の最後の場面「フォルトゥナトゥスへの反論」(図12)にも見られる。この場面は、アウグスティヌス自身による著作『マニ教徒フォルトゥナトゥス駁論 (*Acta contra Fortunatum Manichaeum*)』に記録された逸話を表現している<sup>67</sup>。392年8月、アウグスティヌスは、ヒッポにおいてマニ教の司祭フォルトゥナトゥスとの公開討論に臨んだ。両人は2日間にわたって、聴衆を巻き込みつつ、善悪二元の対立、悪の起源、罪と自由意志の問題を論じる。最終的にフォルトゥナトゥスは、アウグスティヌスの問いに答えられないまま討論を終えた。墓碑のレリーフ左半分では、隠修士たちに囲まれたアウグスティヌスがフォルトゥナトゥスと問答する様子が描かれる。アウグスティヌスの頭部はレリーフの上枠を突き抜け、天からの啓示を直接受けている。右下部分では、討論を聞いて回心したマニ教徒たちに、司教服姿のアウグスティヌスが洗礼

<sup>65</sup> Ibid., p. 204.

<sup>66</sup> Moskowitz, *Nicola Pisano's Arca di San Domenico and Its Legacy* cit., p. 28.

<sup>67</sup> 『アウグスティヌス著作集』第7巻、岡野昌雄訳、教文館、1979年、61-100頁。

を受けている。右上では論争に負けたフォルトゥナトゥスが惨めにヒッポを去る。アウグスティヌス伝のテーマとしては珍しい選択であり、これを主題とした当時の表現は、管見の限り他にない。

しかし、ドメニコ会やフランチェスコ会の活動を意識したものであるとすれば納得もできよう。説教者修道会 (Ordo fratrum Praedicatorum)、通称ドメニコ会は、福音を宣べ伝え異端に対抗するために設立され、13世紀にはモンゴル帝国およびペルシャ、アルメニア他に向けて旅立ち、説教と論争をもって異教徒に立ち向かっていた。フランチェスコ会の創始者アッシジのフランチェスコもまた、イスラーム世界への宣教に意欲的であり、1219年には十字軍に伴いエジプトに渡ってスルタンに改宗を迫っている。フィレンツェのサンタ・クロッチェ聖堂バルディ礼拝堂には、ジョットによって描かれたフレスコ画《火の試練》がある(図13)。フランチェスコがスルタンの前で燃え盛る火に入ろうとすることで、福音の真実を証明する場面である。スルタンの祭司たちは火を恐れて逃げ帰った<sup>68</sup>。アウグスティヌス隠修士会もこれらに劣らぬ活動をしようと、アウグスティヌスの姿を借りて訴えているのかもしれない。

フランチェスコ会とドメニコ会は、とりわけ前述の第2リヨン公会議以降、常にアウグスティヌス隠修士会の良きお手本であった。



図13 ジョット《スルタンの前での火の試練》1317-1325年、フレスコ、フィレンツェ、サンタ・クロッチェ聖堂バルディ礼拝堂

### 3. 墓碑の不整合性と隠修士会の対外姿勢

しかし、墓碑制作に際してのこれらの動機、すなわちアウグスティヌス律修参事会やパヴィア市民に対して隠修士会の権威と正当性を訴える、巡礼者たちに礼拝目標を提供する、先行する托鉢修道会と肩を並べるといった動機がその後果たして満たされたかを考えた時、疑問をもたずにはいられない。アウグスティヌスの墓碑の主題には全体の一貫性が見られず、またその後の墓碑は数回にわたって聖堂の内外を移送され、期待された役割を果たしたとは言い難いのである。

まず墓碑全体を見渡してみると、上に見たようなアウグスティヌス隠修士会側の主張が必ずしも一貫していないことが明らかになる。上記の「洗礼／着衣」や「会則の授与」からは確かに隠修士会側の明確なメッセージが読み取れる一方で、墓の中心的存在であるアウグスティヌスの横臥像は司教の服を纏っており、隠修士会の文脈からは外れている。モスコヴィッツは、このような横臥像は、聖人の墓ではなく教皇や枢機卿、司教の墓に見られる特徴であると指摘する<sup>69</sup>。上記ザクセンのヨルダンによる『修道士たちの生に関する書』も司教としての側面を強調している。奇跡を描いた10枚の場面にも、アウグスティヌスが司教の服を着ているもの(図5の10、11、15、16、18。計5枚)と、司教服と隠修士服を重ねて着ているもの(図5の12、13、17。計3枚)が混在しており<sup>70</sup>、そこに規則性を見出すことができない。

さらに、先行する修道会と肩を並べる壮麗な墓が欲しいという動機に対しても、それが果たされたか否かの問いには厳しい評価を下さざるを得ない。この墓碑は、14世紀に作られた他の聖人墓の通常の図像構造を無視した非論理的な構造になっている。前述の聖ドメニコの墓や殉教者聖ピエトロの墓では、美德がそのすぐ上にある「生涯」を構造的にも概念的にも支える形になっており、「美德がその生を支え、死が天の報いを受ける」という伝統的な上昇論理の展開しているのに対し(図10-2、11-2)<sup>71</sup>、パヴィアの墓碑で

<sup>68</sup> ルチアーノ・バッローシ『ジョット』野村幸弘訳、東京書籍、1994年、71-79頁。

<sup>69</sup> Moskowitz, "A Tale of Two Cities: Pavia, Milan, and the Arca di Sant'Agostino" cit., p. 4; Bourdua, op. cit., p. 40.

<sup>70</sup> 残りの2枚にはアウグスティヌスは描かれていない。



は、アウグスティヌスの横臥像が墓碑の中段部分に置かれており、それによって下段の「美德」と上段の「生涯」が切り離された結果、先例のような論理性を欠くものになってしまった<sup>72</sup>。さらに、殉教者聖ピエトロの墓においては、聖人が聖母の傍らで天に昇り、聖人が天上で救われることが暗示されているのが最も重要な要素であって<sup>73</sup>、ここで正しい昇天の秩序が完成しているが<sup>74</sup>、これに対しパヴィアの墓碑にはそのような要素が見られない。

秩序の破綻は墓碑の中心部でも起きている。仰向けに横たわるアウグスティヌスは、天井から下方に突き出た父なる神と向き合っている<sup>75</sup> (図14)。これは、至福直観をめぐる教皇ベネディクトゥス12世の公式見解を取り入れた可能性がある。

至福直観 (visio beatifica) とは、トマス・アクィナスによれば「知性の働きによって神の本質を直接的に直観ないし知覚すること」である。キリスト教徒にとっての最終的な目的とされる。では至福直観はいつ可能となるのか。死者は、個別的審判を受けた後すぐに天国で神と相まみえることができるのか、あるいは終末における普遍的審判を待つ必要があるのか。1331年、教皇ヨハネス22世は説教の中で、義人の魂は最後の審判が下されるまで神を完全な姿で視認することはないとの見解を表明した。この説教は、個別的審判後すぐにそれが可能であるとする多くの神学者から批判を受ける。当時ヨハネス22世は、フランチェスコ会厳格派を中心として起こっていたいわゆる「清貧論争」に介入し、托鉢修道会のみならず神聖ローマ皇帝ルートヴィヒ4世をも巻き込んだ騒動の渦中にいた。これを鎮めるために、1336年、ベネディクトゥス12世は、肉体の死と引き換えに神を視認する能力が備わる、すなわち義人は最後の審判を待つことなく死後すぐに至福直観を享受するとの当時の定説を、正統神学の教説として定める<sup>76</sup>。アウグスティヌスの「葬儀<sup>77</sup>」が再現されたパヴィアの墓碑の中央部では、死後間もないアウグスティヌスがまさに神と「顔と顔を合わせて」(『コリントの使徒への手紙1』13:12) 向き合っている。この墓碑が当初台座なしで置かれていたとすると、「至福直観」はちょうど巡礼者たちの目の前で上演されていたことになるだろう (図15)。しかし、近視眼的には完成したといえるこの理論を大局的に観察し直したとき、秩序はたちまち



図14 アウグスティヌスの横臥像と「至福直観」  
C. Ferreri and D. Sacchi, *L'Arca di S. Agostino: monumento in marmo del sec. XIV ora esistente nella Chiesa Cattedrale di Pavia, Pavia, 1930, Fig. 2-3より引用*

<sup>71</sup> Moskowitz, "Giovanni di Balduccio's Arca di San Pietro Martire" cit., p. 9.

<sup>72</sup> Moskowitz, "A Tale of Two Cities" cit., p. 4.

<sup>73</sup> Moskowitz, "Giovanni di Balduccio's Arca di San Pietro Martire" cit., pp. 7-18.

<sup>74</sup> Cosma, op. cit., p. 322.

<sup>75</sup> C. Ferreri e D. Sacchi, *L'Arca di S. Agostino: monumento in marmo del sec. XIV ora esistente nella Chiesa Cattedrale di Pavia, Pavia, 1833, p. 18*は Padre, p. 23, p. 105は Padre Eterno としている。ただし、Maiocchi, op. cit., p. 33は Salvatore であるとする。

<sup>76</sup> 教皇ヨハネス22世が行った説教とその影響については、以下を参照。ベルンハルト・シンメルペニツヒ『ローマ教皇庁の歴史——古代からルネサンスまで』甚野尚志・成川岳大・小林亜沙美訳、刀水書房、2017年、278頁。赤江雄一「揺らぐ言葉と説教者の権威——教皇ヨハネス22世の至福直観の教義をめぐる説教」『ことばの力——キリスト教史・神学・スピリチュアリティ』関西学院大学キリスト教と文化研究センター編、キリスト新聞社、2023年、55-81頁。至福直観論争と墓碑の表現との関連については、以下を参照。松原知生「至福直観の媒介装置としての墓碑——アッシジ下院サン・ニコラ礼拝堂ジャン・ガエターノ・オルシーニ枢機卿墓碑再考」『西南学院大学国際文化論集』第37巻第1号、2022年、13-52頁。

<sup>77</sup> Dale, op. cit., p. 107.

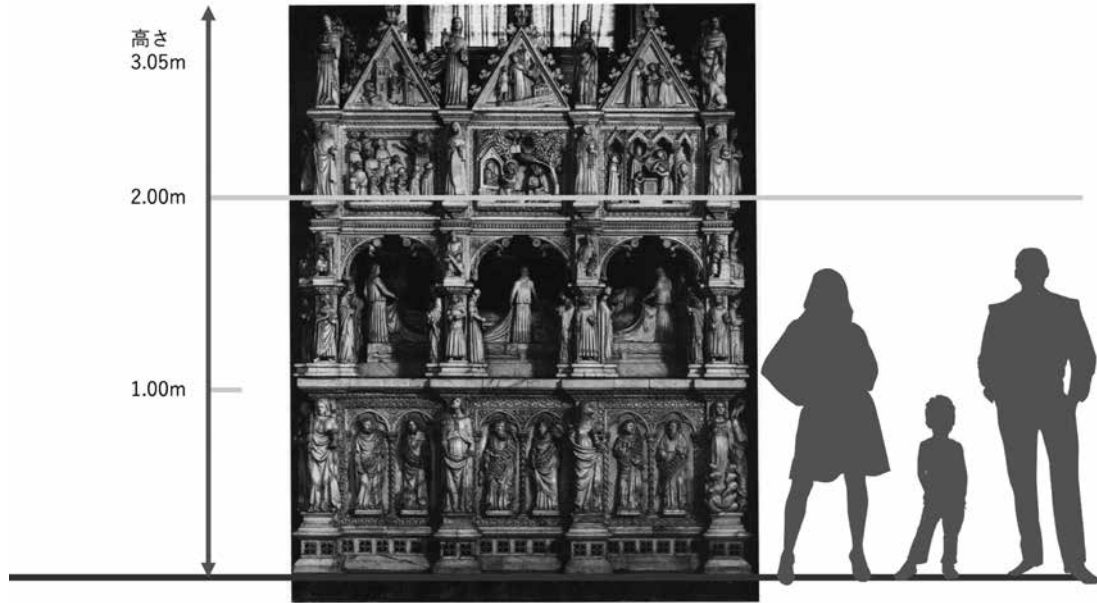


図15 聖アウグスティヌスの墓碑と人物

崩壊する。墓碑全体においては、永遠なる神の上にアウグスティヌスの生涯が乗せられてしまったのである。眼前のスペクタクルは巡礼者に対する配慮であったかもしれないが、それが破綻を招いたといえる。

しかも、パヴィアのアウグスティヌスの墓碑は、その後早くも1365年にはアウグスティヌス隠修士会の「聖具室 (sagrestia)」に運び込まれ、以降長く隠修士会士以外の目には触れないところに置かれている<sup>78</sup>。この移送もまた、墓碑制作現場の混迷を裏付けるものであろう。1397年から1402年の間に書かれたとされるジャン＝ガレアツォ・ヴィスコンティの遺言が、「墓碑を完成させ、アウグスティヌスの遺体をそこに納める」よう要請している<sup>79</sup>ことから推測するならば、1365年の移送の時点では、墓碑は未完成の状態であったはずである。さらに、騎士ジャコモ・ダル・ヴェルメの1406年の遺言には、墓碑を聖具室から「しかるべき場所に (loco debito)」移動させるために、財産を寄進することが記されている<sup>80</sup>。「しかるべき場所」がどこであれ、墓碑の聖具室への移送が本来予定されていなかったことを示唆するものである。

墓碑はなぜ、未完成のうちに、予定外の場であるアウグスティヌス隠修士会の聖具室へと移されたのか。

この理由についてコズマらは、律修参事会と共有する場所から隠修士会のみが支配する場所に移したのだと理解する<sup>81</sup>。しかし、上に検討した墓碑制作の動機のどれを取っても、隠修士会以外の多くの人の目に触れるところに置かなければ意味をなさないものばかりであり、隠修士会が独占したままでは目的を達し得ない。これに対しブルドゥアは、この移動の理由は「不可解なままである<sup>82</sup>」としつつも、「2つの共同体〔アウグスティヌス隠修士会とアウグスティヌス律修参事会〕の間の争いの結果、墓碑は「律修参事会に属さない」場所に移さざるを得なかったのかもしれない<sup>83</sup>」との可能性を指摘している。

<sup>78</sup> 上記アントニオ・ダ・トルトーナの記録によれば、総長アンドレア・ダ・ボローニャのもと、1365年8月20日にアウグスティヌス隠修士会の聖具室に運び込まれ、記録が書かれた16世紀現在もそこにあるという。Maiocchi, op. cit., p. 11. この聖具室は単なる倉庫ではなく、少なくとも1381年9月14日以降、祭壇を備え、隠修士たちの毎日の典礼に使用されたことが記されている。Bourdua, op. cit., p. 36. 墓碑が運び込まれて十余年、「しかるべき場所」に戻す術を断念したか。

<sup>79</sup> Ibid., p. 39.

<sup>80</sup> Ibid., p. 39.

<sup>81</sup> Cosma, op. cit., p. 322.

<sup>82</sup> Bourdua, op. cit., p. 32.

<sup>83</sup> Ibid. p. 31.

本稿はこのブルドゥアの見解に同意すると同時に、「2つの共同体の間の争い」をさらに具体的に考えてみたい。アウグスティヌス隠修士会がこの墓碑を引き取らざるを得なかったのは、先に確認した会の配慮姿勢が、ここでは不首尾に終わったためではないか。

「洗礼／着衣」及び「会則」でアウグスティヌスが隠修士であったことを誇示し、隠修士会が己の優位を主張したことは既に検討したが、しかしこれはアウグスティヌスが参事会員であったことにこだわる律修参事会にとっては、到底受け入れ難いものだったに違いない。実際、1354年には律修参事会士アルンのドゥラントゥスが、著作『聖アウグスティヌス隠修士会の起源と発展について矯正する論文 (*Correctorium tractatus de origine et processu Ordinis fratrum sancti Augustini*)』の中で、隠修士会士たちの主張する特権的な状態に対する反論を書いている<sup>84</sup>。

聖アウグスティヌスは、隠修士たちの唯一の父でも守護者でもなく、また隠修士は、修道士説教者〔ドメニコ会士〕や、律修参事会の修道士など、聖アウグスティヌスの会則に従う他の修道士たちと同様に、聖アウグスティヌスの特別な息子でもない。隠修士会は聖アウグスティヌスによって唯一創設されたのでも、特別に創設されたのでもないのである。さらに私は、聖アウグスティヌスが隠修士たちの衣服に身を包んだことも、隠修士たちの『会則』を書いたことも、隠修士たちにその衣服を与えたことも、隠修士たちと個人的に生活を共にしたこともなく、むしろ律修参事会士たちと共に生活したのであり、その律修参事会士たちのために、アウグスティヌスは主体的かつ独自の衣服を伝え、律修参事会士たちの共同生活に基づく『会則』を書いたのであり、律修参事会の名前はそこからきていることを明らかにする<sup>85</sup>。

とは言え、そもそも両修道会の争いが実に17世紀まで継続したことの意味を改めて考えるならば、聖堂を共有する両者には、摩擦のみならずそれなりの譲歩も時にはあったと想像できる。実際、1331年には一旦両者の間に和平協定が結ばれている<sup>86</sup>。律修参事会に対する隠修士会側の「譲歩」あるいは「付度」として、横臥像に司教服を着せて墓の中央部に置き、奇跡の場面にもやはり司教服姿のアウグスティヌスを多めに入れる配慮を見せた、という可能性はないだろうか。後の文書の中に、墓碑の制作費が金4,000フロリンという大金であったことを隠修士会が律修参事会に示す記載が残されている<sup>87</sup>。両修道会間の訴訟文書であり、金額が誇張されている可能性は差し引いて読まなければならないだろうが、少なくとも隠修士会側はこの墓碑が律修参事会にとっても有益であったと考えていたことを示唆するものである。対立する相手にも配慮を見せるというアウグスティヌス隠修士会の姿勢が現れたものであったかもしれない。しかしその結果、全体のメッセージは一貫性を欠き、上述のように教会秩序にも先行する聖人墓の論理にも整合しないものとなった。結局、どちらの修道会にとっても不満足なものとなり、墓碑制作の音頭を取った隠修士会側が早々に引き取らざるを得なくなった、という顛末が想像できないだろうか。

さらにデールは、この墓碑は隠修士会とミラノのヴィスコンティ家との関係を考慮して解釈すべきであると言う<sup>88</sup>。ヴィスコンティ2世とその妻ブランシュがパヴリアで権力の座を確立しつつある時期に制作が開始され、隠修士会とヴィスコンティ家との絆を強化すると同時に、ヴィスコンティとアウグスティヌスとの関係をも結びつけることになったという主張である。しかもこの関係強化は、教皇庁の世俗的権力の促進を図る当局にとっても嬉しい状況であり、隠修士会にパヴリアへのアクセスを認めてくれた教皇

<sup>84</sup> Andrews, op. cit., p. 162.

<sup>85</sup> Saak, *High Way to Heaven* cit., p. 173.

<sup>86</sup> Ibid.

<sup>87</sup> Moskowitz, *Nicola Pisano's Arca di San Domenico and Its Legacy* op. cit., p. 32.

<sup>88</sup> Dale, op. cit. p. 91.

庁への恩返しでもあったとデールは言う。隠修士会がこの三方良しの関係をも射程に入れていたならば、ここぞ得意の手腕を発揮すべき場面であったろう。それは一面では成果をもたらしたかもしれないが、しかし他面、バヴィアの市民にとっては、受け入れ難い状況には違いない。市民たちは、その支配から逃れようと長年ミラノとの確執を続けており<sup>89</sup>、しかも上記のとおり教皇庁とも険悪な関係にあった。彼らがこのような素性の墓碑を手放しで受け入れたとは考えにくいのである。こうした事情も、市民の目に触れない聖具室に墓碑を退避させなければならなかった理由ではないだろうか。

## おわりに

いずれにせよ墓碑は、1900年に現在の場所である内陣中央に高々と掲げられるまで、聖堂内外を転々と移動しなければならなかった<sup>90</sup>。このような主題上の不整合や制作経緯での迷走を考えると、我々はバヴィアのサン・ピエトロ・イン・チェル・ドーロ聖堂のアウグスティヌスの墓碑を、アウグスティヌス隠修士会の多方面に対する配慮が功を奏することなく終わった不名誉な例として語るべきかもしれない。アウグスティヌス隠修士会は、発展初期の段階において、ローマのアエギディウスを手本として独自の対外姿勢を身につけ、それによって数々の輝かしい成果を得てきた。ただしそれは、良きにつけ悪きにつけ、相手が大局的な視野と政治的能力を備えていたが故である。バヴィアでは、教皇や王侯ではない一般の聖職者や市民を相手に、それまでとは異なるアプローチが必要であることを学んだだろう。成立間もない集団が一つの共同体としてアイデンティティを獲得するそのプロセスの、手痛い試行錯誤の跡としてこの墓碑を評価したい。

<sup>89</sup> ミラノとバヴィアの6世紀以来の確執については、Ibid., pp. 19-89を参照した。

<sup>90</sup> 墓碑はその後18世紀まで聖具室に置かれ、その後3回の移動を経たのちに、1900年、サン・ピエトロ・イン・チェル・ドーロ聖堂が修復された際に現在の内陣中央に移された。Bourdua, op. cit., p. 29, n.1.